摘錄

○牧野英一　カツダール主義（海をわたり野をわたりての一節）

カツダールとは、手車で紡いだ木綿糸から手織でこしらへた織物である。印度のガンディーは、カンボールの全インド國民大會に臨んで、カツダールの爲めには自分はのぼせて氣が狂つてゐるといつた。全印度國民をして、みづからカツダールを作り、自らカツダールを着用せしめむとするのが、ガンディーの主張であり、其一派の人々の固持する所である。全印度國民大會は、回を重ねることが四十回、インドの國民運動は、このガール、インディヤ、ナショナル、コングレスにその焦點を有する。さて從來はこの會員たるには一年に會費として手紡ぎの木綿絲二千ヤードを納めることになつてゐたが、從來これに反對があつて去る九月パトナの大會で、會費は二千ヤードの糸又は金四アンナとなつた、其外に會の規則として大會にて議決に加はらむとする者は必ずカツダールの衣服を着用せねばならぬといふことに定まつてゐる。金四アンナ以て木綿糸二千ヤードに代へることを許すことにしたのは、ガンディーとしてはよほどの讓歩である。しかし何人も自ら紡ぎ二千ヤードの絲を以てせねば愛國者の仲間に入れないといふのは餘りに窮屈であるから、ガンディーはいさぎよく讓歩した。しかしガンディーは一派の反對者がその主張を以て、結局は僞善に歸着するに過ぎないとし、國民運動は區々たるカツダールに存するものでよいとするに對してはあくまでも自己の立場を主張する。カツダール主義は單に精神的な問題に止るものではない。現實にカツダールを作り現實にカツダールを着用することは更に道德的な事であり、經濟的なことであり、社會的な事であり、政治的なことであるとするのである。カツダールに依つて紡績の糸機械の糸を驅逐することは、外來の思想乃至壓迫から全インド國民を救濟し獨立せしめる所以のものであると主張する。苟も志だに存するならばカツダールを着ると否とはどうでもいゝではないかといふ反對論は之を認容することが出來ない、カツダール主義は文字の上での主張に止まるのでなく、どこまでも實際的な主張である。蓋しガンディー一派の主張は、自國の產物を用ひ自國の產物に滿足し、自國の產物を尊重することが、インドの自治……獨立とはいはぬ……を贏ち得べき第一の手段であるとし、英國の帝國主義に對し無抵抗主義を以て、祖國の國民的復活を畫策しようとするのである。（筆者はかうした印度の國民運動に興味をひくと同時に我國に於て天保文化の際に關八州を風靡した大原幽學の性理教會を想起する、性理教會の運動は明治六年遠藤良右衛門の死によつて頓挫したことであつたが、その國粹的な處世の實行については、處世の價値少からざるものがある。ガンディーと性理教會とは全く違ふけれども、どこかに似た處があると思ふ。我等もカツダール主義に歸依してはどうかとも思ふ。（F）

七九